

フォト・ストーリー：ストリートチルドレンの自立のための音楽とダンス



シャールク・シェイクくん（12歳）と妹のクスムちゃん（9歳）は、JICAが支援する光の音符というNGOがムンバイで実施する音楽とダンスのクラスに出席する生徒40人のうちのひとりです。（写真撮影：スワティ・シャヒ/OWSA）



モヒットくん（14歳）の夢は軍人になること。光の教室に来ていたシャールクくんが見ている前でカッコよく敬礼してくれました。（写真撮影：サティシュ・ナガラジ/OWSA）



日本では音楽の先生を務める西村ゆりさんが光の音符を運営しています。仕事への情熱と子どもたちへの愛のおかげで、ムンバイの市立アクウォース病院内にある光の教室はいつも満員です。（写真撮影：スワティ・シャヒ/OWSA）



BLP (Bombay Leprosy Project) スバーシュ・ホヴァルさんは、ゆりさんが JICA 事業として実施する光の教室の運営を支えています。（写真撮影：サティシュ・ナガラジ/OWSA）



光の教室では音楽のクラスが人気です。フェロズくん（中央）は他の生徒に囲まれながら手作りのドラムを披露しました。（写真撮影：サティシュ・ナガラジ/OWSA）



ロンメル・ディソーザ先生がキーボードを使って子どもたちを教えています。先生のクラスは毎週木曜日に開催されます。（写真撮影：スワティ・シャヒ/OWSA）



英語を教えるフローラ先生が見守る中、ディソーザ先生は年少の生徒に音階を教えます。（写真撮影：スワティ・シャヒ/OWSA）



ゆりさんは手作りの教員マニュアルを使って、フローラ先生に鍵盤の音階を教えます。（写真撮影：サティシュ・ナガラジ/OWSA）



シャールクくんとフェロズくんは他の生徒と一緒に給食を食べます。この日の給食は、ゆで卵とダル（豆スープ）とご飯でした。（写真撮影：スワティ・シャヒ/OWSA）



無料の給食は、子どもたちが光の教室に来たりその家族が子どもを教室に通わせたりするための動機づけです。教室に来る多くの子どもやその家族は、食事もままならないほど貧しいからです。（写真撮影：スワティ・シャヒ/OWSA）



造形芸術を教えるカルミン・フェルナンデス先生（左）、フローラ先生（中央）、ヒンディ語を教えるギータ・サトペ先生（右）は、光の教室での仕事を誇りに思っています。（写真撮影：サティシュ・ナガラジ/OWSA）



西村ゆりさんは、路上で生活する子どもたちやその家族に大変愛されています。ゆりさんの素晴らしい奉仕精神と彼女がこれまでやってきたことが認められているからです。笑顔のゆりさんと路上で暮らすひとたち。（写真撮影：サティシュ・ナガラジ/OWSA）